

INSIDE-OUT

木更津市立木更津第二中学校
〒292-0801 千葉県木更津市請西941番地
☎0438(36)2280 FAX0438(36)2233



木二中 学校だより No.39 令和6年2月19日
校長 山元 竜二

E-mail:kisarazu2-j@kisarazu.ed.jp
https://www.fureai-cloud.jp/kisa-kisarazu2-j

'95 夏 第77回全国高校野球選手権千葉大会 準決勝 での感動秘話

久しぶりの野球ネタです。私立高校での硬式野球部顧問歴が長いため、また野球ネタとなりましたが許してください。
*実名での掲載について本人から直接快諾を得ています。

1995年。当時、例年に比べ暑い夏だったことを思い出します。甲子園球場への切符を賭けた高校野球地方大会（千葉県予選）は、7月末に佳境を迎え、準決勝、決勝の3カードを残すだけとなりました。当時コーチとして顧問を務めていた拓大紅陵野球部も4回戦、印旛高校との延長16回の死闘を制し4強入り、名門成田高校と準決勝を戦うことになりました。

試合は成田が中盤4回に2点を先制、続く5回には1点を追加、6回、7回に拓大紅陵が1点ずつ反撃するも逆に8回に1点の追加点を許し、4対2の劣勢でとうとう最終回の表を迎えました。

先頭打者、痛烈にセンター前ヒット。2点を追いかける拓大紅陵は手堅い作戦をとらず奇襲策を選択、それが相手のエラーを誘い無死1、2塁。代打で大会初出場の3年生がライト前にタイムリー、1点差。三振、四球を挟んで一死満塁、3塁ランナーが返れば同点、2塁ランナーが返れば逆転の大チャンス。バッターはキャプテンの相原克俊君（大貫中出身）でした。

成田高校はたまたらタイムを宣告、試合が一時中断したそのときでした。相原君はベンチに向かって人差し指を立て、大きくうなずきながら何かを叫んでいました。その言葉は…

（1塁側ベンチの監督さんに向かって）「1球目を打っていいですか？ 初球、打っていいですか？」

試合を決める大事な場面。監督に向かってシグナルを送っていたのです。並の選手なら、いや、この場面ならどんなに素晴らしい選手でも監督の指示やサインを求めるでしょう。スクイズでも同点。相手投手のボールを見極めてフォアボールでも同点。もしかしたらバッテリーミスで同点になるかもしれない圧倒的なチャンスですから。1球目を打っていく作戦には大きなリスクがありました。併殺（ダブルプレー）でゲームセット、敗戦になるからです。相原君の心の強さには驚かされました。

監督も彼の心の強さに賭け強攻策、結果は初球を痛烈にレフト線へ、3人の走者をすべて生還させる逆転タイムリーツーベースヒットとなったのです。それからがまたさらに相原君の人間性のすばらしさが…。

最終回に逆転を許して肩を落とす成田高校の野手に2塁ベース上の相原君が大きな声で手を叩きながら何かを話しかけているのです。中継のテレビ画面にもその様子が大きく映し出されていました。何を話していたと思いますか？私は試合後に大会関係者と新聞記者からその内容を聞かされ、涙が出る思いをしたことを強く覚えています。がっくりと肩を落とす成田の選手に、（手を叩きながら）

「試合はまだ終わってないよ、お前らにはまだ裏の攻撃があるじゃないか。もっとお互いに全力を出し合っていい試合をしようよ。ほら、まだまだ、まだまだ、頑張ろうよ。」

甲子園を争う相手選手に、高校生である彼が言った言葉です。あの場面で、普通なら自分の逆転打に酔い、スタンドの応援団に向かってガッツポーズするところでしょう。そんな選手は何人も見てきました。

彼は、入学当時から身体が小さく、3年間野球を続けられるか心配された選手。しかし誰よりも努力し、誰よりも辛い思いをし、だからこそ誰よりも仲間を大事にするキャプテンにまで上り詰めた選手。決して自分の足下を見失わない、誰よりも謙虚な姿勢が、あの言葉につながったのではないのでしょうか。

残念ながらその年は決勝戦で銚子商業に逆転で敗れ、甲子園に駒を進めることはできませんでしたが、マリンスタージアムのさわやかな風が相原君率いる準優勝、拓大紅陵ナインをやさしく包んでいました。

なぜキャプテンの相原君は、自らが逆転打を放っておきながら、相手選手を気遣う言葉をかけたと思いますか？木二中生のみなさん、よく考えてみてください。

彼には小さい頃、身体が小さいことが原因でいじめられた経験がありました。身体の大きい選手に野球で勝つこともできませんでした。何度も。その辛さや、痛みを彼は誰よりも知っていたのです。当然、九回のあの場面でも、あとアウト2つで決勝進出だった成田高校の選手の気持ちが痛いほどわかっていたはずです。だからこそ、「**どうだ、見たか！**」ではなく、「**お前らにはまだ裏の攻撃がある！**」だったのです。

「身体の小さい俺がここまでやれるんだ、お前らにだってまだまだできるはずじゃないのか？だからお互いもっと頑張っていい試合にしようじゃないか。」

野球のプレイで一流になる、そんなことは選ばれたごくわずかな人だけなのかもしれません。しかし、相原君のように一流の考え方を持とうとする努力は誰にでもできると私は思います。

他人の長所はひがむものではありません。他人の短所は責めるものではありません。長所は讃え、短所は認め、その両方を含めた人格を尊重するのです。(INSIDE OUT No. 7より) どんな状況下におかれても目の前にいる人をリスペクトする。人として一流の考え方だと思いませんか？